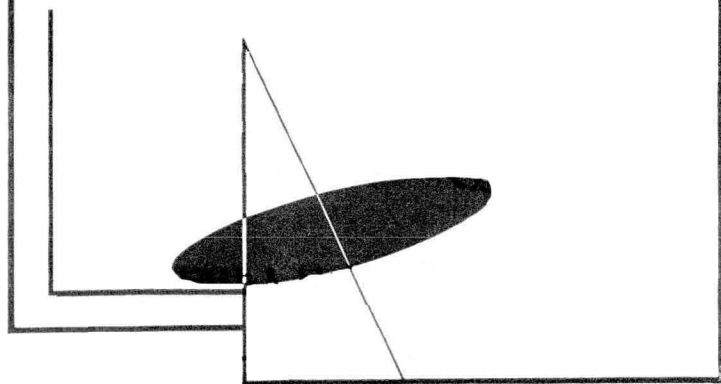




葉山嘉樹
小林多喜二
中野重治
集

現代日本文學全集

38



筑摩書房版

葉山嘉樹
小林多喜二
中野重治 集

昭和二十九年十二月十五日 印刷
昭和二十九年十二月二十日 發行

著者

葉山嘉樹
小林多喜二
中野重治

發行者

古田晁

印刷者

山田一雄

發行所

筑摩書房

電話 (29) 七六五一 (代表) 一四番
振替 東京 一六五七六八

整版 株式會社 精興社
印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 高陽堂
クロース 日本クロース工業株式會社

葉山嘉樹集 目次

海に生くる人々……………五

淫賣婦……………九

セメント樽の中の手紙……………一〇八

小林多喜二集 目次

一九二八・三・一五……………一三

蟹工船……………四五

黨生活者……………八四

中野重治集 目次

中野重治詩集……………二五

春さきの風……………二五一

村の家……………二五八

小説の書けぬ小説家……………二六九

歌のわかれ……………二七九

空想家とシナリオ	三二
五勺の酒	三六一
第三班長と木島一等兵	三七五
日本詩歌の思い出	三八一
子供のための文學のこと	三六五
葉山嘉樹一面（寺田透）	三九一
小林多喜二の現代的意義（藏原惟人）	三九七
中野重治（窪川鶴次郎）	四〇四
解説	四一三
年譜	四二三

装幀 恩地孝四郎

葉山嘉樹集

飯
時。

茶
山
茶
樹

一
つ
十
名
に
集
り
し
ん
に
あ
た
。

電
鐵
工
事
に
あ
た
。

云
電
河
が
、
西
岸
の
断
崖
に
突
入
し
て
し
た
、
乙

乙
ト
の
長
い
地
帯
の
丁
場
に
あ
た
。

未
だ
前
に
、
冬
菜
和
節
の
地
園
に
潤
て
、
こ

い
つ
あ
、
木
雷
川
に
あ
た
る
の
と
ん
ど
や
ぬ
え
を
。

海に生くる人々

室蘭港が奥深く入り込んだ、その太平洋への灣口に、大黒島が栓をしてゐる。雪は、北海道の全土を蔽うて地面から、雲までの厚さで横に降りまくつた。

汽船萬壽丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を詰め込んで、風雪の中を横濱へと進んだ。船には大黒島をかはらうとしてゐる。その島の彼方には大きな浪が打つてゐる。萬壽丸はデッキまで沈んだその船體を、太平洋の怒濤の中へこはごは視て見た。そして思ひ切つて、乗り出したのであつた。彼女がその臨月の體で走れる限りの速力が、ブリッジからエンヂンへ命じられた。

冬期に於ける北海航路の天候は、いつでも非常に險惡であつた。安全な航海、愉快な航海は冬期に於ては北部海岸では不可能なことであつた。

萬壽丸甲板部の水夫達は、デッキに打ち上げる、ダイナマイトのやうな威力を持つた波浪の飛沫と戦つて、甲板を洗つてゐた。ホースの尖

端からは、沸騰點に近い熱湯が迸り出たが、それがデッキを五尺流れるうちには凍るのであつた。五人の水夫は熱湯の凍らぬ中に、その渾身の精力を集めて、石炭塊を掃きやつた。

萬壽丸は右手に北海道の山や、高原を眺めて走つた。雪は船と陸とをヴェールを以て遮つた。悲壯な北海道の吹雪は、マストに悲痛な叫びを上げさせた。

生命のあらゆる危難の前に裸體となつて、地下數千尺で掘られた石炭は、數萬の炭坑労働者を踏み臺にして地上に上つて來た。そして、今海上では同じく生命の赤裸々な危險に、その全身を船體と共に曝露しつゝある、船員の労働に依つて運送されるのであつた。

藤原六雄は、ランプ部屋へ入つて、ランプの掃除をしてゐた。彼は、今年二十八歳のひどくだまりやの、氣むづかしやであつた。そして、一體彼は何か仕事をしてゐるのか、どうか疑はしいほど、労働が嫌ひな性のやうに見えた。彼の職務は倉庫番であつた。

ランプ部屋はブリッジに向ひ合つて、水夫室と火夫室の間に、みじめに、小さく拵へられてあつた。藤原はそこでランプのホヤを拭きながら、水夫達が、デッキを掃除してゐるのを見てゐた。

彼は此頃ボースンにも、一等運轉士にも見込みが悪いことを知つてゐた。「ストキ(倉庫番)にもワシデッキの時には手傳つて貰はなきゃならん。一萬噸も八千噸もある船とは異ふんだからな」と、いつか水夫達全部が揃つて飯を食つ

てる時にボースンに云はれたことがあつた。「ふん、ストキとは倉庫番でことだ。倉庫番は倉庫の番さへしてりや、それで澤山だらう」と、彼は答へた。

——それ以來、どうも、俺は水夫たちの仲間からまでも受けがよくない——と、淋しさうに、ストキは考へた。

船のエンヂンはフルスピードをかけてゐたが、風と浪とで速力が全で出なかつた。未明に出帆したのに、夕方になつても未だ津輕海峡沖を抜け切らなかつた。

その夜、高等船員側では室蘭へ引きかへさうかとの相談も行はれたが、それは實行されるには至らなかつた。

水夫達は、暴風雪がだん／＼猛烈になつて來るに連れて、その作業も平常とは趣を異にし初めた。船體は保險マーク以上に沈んでゐるので、充分に抵抗的であつて、波浪は一つも残らずデッキへと打ち上げた。そしてデッキは一面の海になつてしまつた。掬ひ込む水は仲々小さな排水口から急には出て行かなかつた。デッキには、ハッチの上を通るやうに、ライフライン(命綱)が張られた。いつデッキを通らうと試みても、そこは外海と何等異なる處はないからであつた。浪はその山と山との間に船を挟んでしまふ。その谷になつた部分が船のヘッドから胴體へ進む時、次の山の部分がヘッドに打ち衝る。鐵製

のわが萬壽丸も、この苦悶には堪へかねて、斷末魔の叫びを擧げる。ミリミリ、ドタン！とうなる。その谷がやがて、ともへ行くと推進器は空中で空回りをする。推進器は、飛行機のプロペラのやうに空中で廻轉する。兎暴なその船の太さほどの猛獸のやうに吠える。特別装置のないどの棚からも、いろんなものが落ちる。ランプのカップからランプが踊り出る、舵機は非常にその效力を減じられる。速力は今でもう推進器の空轉の危険から、殆んど三哩位に減じられて、たゞ船首を風の方から轉換しないやうにのみ總ての努力を盡してゐた。

機関室の方も汽罐室の方も、非常な困難があつた。油差しは、動搖のために、機械と機械との狭い部分に入り込むのに、神祕的な注意を拂つた。火夫はその汽罐の前で、シヨベルを持つて、よろけまいとして骨を折つた。

汽罐室の眞上のコック場では、コックが、いつも一度で炊く飯を五度位に分けて炊かねばならなかつたし、お菜も同様な方法にして猶、汁物は作るわけに行かなかつた。

コロッパス(石炭運び)は、石炭庫の中で、頭中を痛だらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかつた。

水夫等は、デッキを洗ふ波浪からダンブル内への浸水を守るために、ハッチカバー(船艙の蔽ひ)や、それを押へた金具や、又その上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかつた。それは危険な作業であつた。そして此危険な作

業なしには、此の船全體が危険から免れ得る方法がなかつた。恰も意地の悪い馬が馴れぬ乗手にするやうに、船體は猛烈にその背を振つた。そしてその毎に柄杓が水を掬ふやうに、デッキは波浪を掬ひ込んだ。ロープは濡れて、固くなつて操作に非常な困難と遲滞とを招いた。然し夫は成し遂げなければならぬ仕事であつた。ハッチが水を飲むと云ふことは、文句なしに、簡單明瞭に船體の沈没を意味するものであつた。

五人の水夫と、ボースンと、ストキと、大工との八人が總動員で、此仕事を遂げた。彼等は、その體が、そのまゝ凍るやうな風の下に、メスのやうに光る、そして痛い波浪に刺された。そしてそれは、餘り動かない部分をカンカンに凍らせた。

船體の危険と、船體と共にする自分自身の危険と、そして、觀面に自分の凍えんとする肉體に對する危険とは、火事が中風の婆さんに、石臼を屋外まで抱へ出させるほどの目覺しい、超人間の活動と、水夫達に與へた。そして、船首のハッチ二つは完全にその防備が出来上つた。

未だ二つのハッチが船尾の方に残つてゐた。そして、時間は今夕食に迫つてゐた。水夫たちは、飢えを感じた。けれども、海も飢えを感じて、わが萬壽丸を呑まうとしてゐるのであつた。

船は絶えず藻掻き、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギンは絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決闘するやうに打ち合つた。船尾ではプロペラが、その手を空に振り上げた。

自然と人力とはその最大の力と、あらゆる智慧とを以て戦闘した。

三

船を一廊として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戦つてゐる時に、船員たちは、自分たちが、船のりであることを、此時以上に頼りに障り、心細くなり、衰れに氣の滅入ることはなかつた。そして彼等は、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意にも拘らず、自分の運命を哀れむのであつた。彼等は、眞つ暗な闇の中を電光が一時に、全く鮮明にバツと明るく照らす様に、此困難な勞働の間に、感ずる處の彼等の地位は、全くハッキリした賃銀勞働者の正體であつた。然し、それは電光と全く同じであつた。彼等は、すぐ、その仕事の方へと一切の注意を向けねばならなかつた。

水夫等は、船首の方を濟まして、船尾のハッチへ行くために、サロンドッキに上つた時であつた。ブリッジにゐたコーターマススターの小倉が、何か分らぬことを、體中で怒鳴りながら、物凄い勢ひでブリッジから飛び下りて來て、サロンドッキを體の方へかけて行つて、そのタラップをまた飛び下りた。

セイラーたちは、ビクリとした。のみならず、コック場のコックやボーイや交替で休んでゐた機関長や、ブリッジの上の船長やは、全部が小倉の飛んでつた行方を見守つた。

小倉は、船尾へ駆けつけた。そこには、ブリ

ッヂから操るスティームギア（蒸氣舵機）の鎖と、そのカバーとの間に、わざとのやうに、水夫見習が、右半身をうつ伏しに潜り込ませてゐたのであつた。

小倉は、水夫見習が樂に出るやうにと思つたのであつたが、然し舵機は同位に船首を保つために、一刻も放擲しては置けなかつた。

そこへ水夫等は全部かけつけた。あるものは、カバーの金板をバーで動かさうと試みた。此間にも波浪は、船首甲板ほどではないにしても三四度、此處を洗つた。

水夫全體の力と小倉との力は水夫見習を、鎖とカバーの間から引つ張り出すことができた。けれども見習は、引きずり上げられた溺死體のやうにだらりとして、眼ばかりを宙につつてゐた。彼は直ちに、水夫二人に擔がれて、最も震動と、轟音との甚しい船首の、彼の南京蟲だらけの巢へ連れ込まれた。

仕事着を彼から脱がせることは最大の急務であつた。が同時に最大の困難でもあつた。まるで帆布作りの仕事着でもあるやうに、それは凍りついてゐたのである。ついて來た藤原は、その腰のメスを抜いて見習の仕事着を上手に切り裂いた。そして、彼の寢間着が、上にかげられた。

ボーイ長の右手と右の肺の部分に紫暗色の打撲傷が出來てゐた。そして左足の拇指が碎けてゐた。

ストーブがないために、水夫等は甚しく寒か

つた。見習は、傷と、凍のために、若し此のまゝにして置くならば、必ず、始末は早くつくとも云ふことを皆知つてゐた。そこでついて來たストキと、水夫二人は各水夫の巢から、ありつたけの毛布を集めて、それをかけてやつた。

そして、そのまゝ、全部彼等は船尾ハッチのカバー作業に驅けて行つた。

船尾のハッチは船首のそれと同様の危険と困難をもつて、作業された。手の屈きさうな低空を、雪雲が横飛びに飛んだ。中に、濃い雪雲は、マストに引つかうつてそれを抜いてでも行くのかのやうに、はげしくマストを揺ぶつた。水平線は、頭上遙に昇るかと思ふと、足下深く沈んだ。（船の動揺は、同時に水平線を動かすものだ。）ボーイ長（水夫見習を云ふ）の運命は、全甲板労働者の現在のすぐ背後に鱈のやうに迫つてゐるのであつた。

船尾部分のハッチは此上もなく嚴密に密閉された。そして、次ののは、機關室と、その上部に在る士官室、サロンドッキとの蔭になつてゐたために、以前の三つに比較べて、作業は樂であつた。そこで、藤原は、ランプを燈す準備をするために、再び「おもて」（船首部分）へ歸つて行つた。

ランプ部屋へ入る前に、彼は先づ水夫室へ入つた。未だ十七歳の少年、水夫見習は、痛さに堪へかねて、「お母様、おとうさん」と、兩親を叫び求めては、泣いてゐた。そして、暫く息を詰めて、死のやうな沈黙の中へ落ちて行くの

だつた。藤原は、ボーイ長の寢床の端板に凭れかゝつて、ボーイ長の顔を覗き込んだ。けれども、見えなかつた。一つの窓も開けられてゐない水夫室は、出入口から星の夜のやうな光が辛うじて這ひ込み得ただけであつた。殊にボーイ長のは二層床の下部に當り、光の方を背にしてゐたので、最も暗かつた。藤原は、自分の床から蠟燭をとつて、ボーイ長の枕下に立てた。彼は白ペンキのやうに青ざめて、そしてくらげのやうに衰へてゐた。

未だ、チーフメートは、何等の手當もしには來なかつた。

彼は、ボーイ長を慰めた。そして直ぐにチーフメートが「膏藥」を持つて、のろ／＼來やがるだらう、奴等には、労働者よりも、ブロックの方が比較にならぬほど重大なんだ、然し、心配しないがいい、皆がついてゐるからと云つて、ランプ部屋へ支度に行つた。

萬壽丸は尻屋岬燈臺沖にかゝつた。暴化は其勢を少しも收めなかつた。

水夫等はボートやサンパンを吹き飛ばされないうやうに、それを、より一層始んど、吹き出し度い位に、頑丈に、これでは沈没した時に決して間に合はないと、證據立てられるほど、それほど頑丈に、くど／＼とデッキや煙突にまで、綱を引つ張つた。そして、此の仕事は、波浪の恐れは全然なかつたが、動揺と、風と、おまけに「てすり」がないので、海へ落ちると云ふ危険を伴つた。ボートデッキは、船中で一番高い

部分であつて、それは士官室の屋根と天井とを兼ねてゐた。

水夫達は、一本のロープを持つて、ボートの下へ仰向けに潜り込んだり、ボートの外側——そこはデッキ板一枚の幅しかなくて、海面まで一直線にサイドなのだ——に、今縛りつける、そのボートに括つて綱をからげるために、サイドへ足を踏ん張つて、海の方へ體を傾けたりした。ボースンは、直ぐ前のブリッジから、船長が作業を見てゐたために、その禿けた頭を、章魚のやうに赤くして慌てたり、怒鳴つたり、焦つたりした。

四

陰鬱な薄暗がり、海上に這ひ出たために、右舷に尻屋岬の燈臺が感傷的に瞬き初めた。荒れに荒れる海上に、燈臺の光を眺むるほど、人の心を感傷的にするものはない。此海の上は、今にも我々の命を奪はうとする程暴れ、喚いてゐる。そして、我々の家は宙天から地底へまで揺れ轉ぶ。そこには火もなく、灯さへもない。なのに、あそこには燈臺が光る。その燈臺は、確りと地上に立つてゐて、そこには家族がある。愛すべき子供がある。いとしい妻がある。そこには火鉢があるだらう。鐵瓶がかつてゐるだらう。正月の用意の餅が掲げてあるだらう。子供がそれをねだつてゐるであらう。「もうねんねするんです。ね、夜食べると、ポンポンいたいですよ。サ、ねんね」と、母は今

年三つになつた子供を膝の上に抱き上げるだらう。さうして、可愛くて堪らぬと云つた風に、子供の頬にキスするだらう。さうして、夫と顔を見合せて微笑むだらう。そして、「明日は又隨分澤山鳥が落ちることですわね。こんなにしけるんだもの。鳥だつて船だつて敵ひませんわね」と、云つて、火鉢から鐵瓶を卸して、茶でも入れるだらう。そして、子供に隠して、その父から一枚の煎餅を出して貰つて「坊やはいいい子ね、サ、お菓子」と云つて出し抜けに子供にそれを與へるだらう。

なのに、俺達は、凍えるやうな風と、メスのやうな浪と、雪のやうに冷たい資本家や、氷のやうに冷酷な船長の下で、勞働をしてゐるんだ。俺は何だつて船員になんぞなつたんだらう。

殊に家持ちの下級船員はさうであつた。彼等は、さうでなくてさへも、その家庭に堪らなく曳きつけられてゐるのに、暴化のときには、その心持は長い刑を言ひ渡された囚人が、その家族のことを身も心も惜せ碎けるやうに戀ひ慕ひ、氣遣ふのと異なる處がなかつた。全く、今では、兩舷から、鯨油を流してさへゐる位であつたから。鯨油を流すことは、暴化も甚しくならないとやらないことであつた。

尻屋の燈臺はセンチメンタルに瞬く。日は暮れかけて、闇は、波と波との谷間から煙のやうに忍び出しては、白い波浪の飛沫に、蹴飛ばされてゐた。

舵手の小倉は、船首を風位から變へないやう

に、そのあらゆる努力を傾注してゐた。彼の眼はコムパスと、船の行方とを、機械的に注視してゐた。

と、本船の前左舷遙かな沖合に、一艘の汽船が見えた。「あ、汽船が！」と、小倉は無意識に叫んだ。

船長もチーフメイトも誰もがブリッジの左舷へ集つて、望遠鏡のレンズを向けた。

此少し前から、ボートデッキで、サンパンの下にもぐり込んで仕事してゐた、水夫の波田芳夫と云ふのも、今小倉が見付けたのを見付けて、一人でサンパンの下から眺めてゐたのであつた。ブリッジでは望遠鏡があるために、其汽船は救助信號を掲げて、難破漂流しつゝあるものであることが分つた。

ブリッジからは、直ちにエンジンへ向けて、フルスピードを命令した。一つ救助に出かけようと云ふのであつた。

全乗組員は難破船が見えると、その救助に向ふことを直ちに知つてしまつた。そして、全員はボートデッキへスタンバイした。

わが勇敢な、然も自分も腹半分水を飲んだ半溺死人のやうな、萬壽丸は、その臨月の體で、目的の難破船に、僅かに船首を向けた。極めて、それは僅かの程度であつた。が、本船はグーッと傾いた。そして見る見る中に、その舵が向いても居ないに拘らず、グーン／＼その頭を振り切めた。そして、同時に物凄い怒濤が、船首、船尾の全部を吞まうとするやうに打ち上げて來た。

船長は、今云つた許りであつたにも拘らず、方位を元へ返した。本船は極めて短い五分とからぬ間に、殆んどコースを半回轉しようとしたのであつた。

難破船の稍近くへ近づくことは能きたが、本船はその船首を非常な努力の下に従前通りの位置に返してしまつた。

難破船を救ふと云ふことは、本船と一緒に沈める計畫になると云ふので、船首はもうその向きを換へなかつた。けれども哀れな兄弟たちの乗り込んでゐる妹の難破船は、段々我々の視野に大きく明瞭に入る様になつた。我々は、今のコースを以て進むならば、四哩位の側を通過するであらう。

波田は、サンパンの下から這ひ出して猶も一生懸命に、煙突にもたれて、寒さと、掴み處を同時に得ながら見入つてゐた。狂犬の口を蔽ふ泡のやうな怖ろしい波浪と、此夕暗とに、あの船は吞まれてしまふんだ。彼は自分が二度も沈没に際會した時の事を思ひ浮べては、その難破船に射込むやうな眼を投げてゐた。

その小さな五百噸位の小蒸汽船は、北海道沿岸廻りの船らしかつた。今やその煙筒からは燃え残りの煙草程の煙も出てゐなかつた。汽罐に浸水したのはもうずつと早いことだつたらう。そのマストの下の方には、棧橋に流れかゝつたぼろ布のやうな帆布が、まとひついてゐた。汽罐に浸水してから、どこかのカパーでも外してマストに縛りつけたものであらう。僅かにデッ

キの上でバタ／＼と、その切れつ端が洗濯したおしめのやうに振れてゐた。

それにしても船員は、ブリッヂにも、マストにも、デッキにも、どこにも見えなかつた。津輕海峡を越す時に命を捨てて、ボートでも本船を捨てたのであつたのかも知れない、又は、その各々の室に凍えた體を、動搖のまゝに、お互に打つ衝け合つたり、追つかけ合つたりして、樂しみのなかつた生前の勞働者の運命を呪ひ悲しんでゐるのかも知れない。然し、この暴化はそれほど長く續いた譯でもなかつた。本船出帆の前日が其最高潮であつたのだから未だ二晝夜しか経つてゐない。船員は、或は、一室に集つて、別れのための最後の貧しい食事でもしてゐるのかも知れない。

「あ、俺は二度まで沈没船に乗つてゐた。一度は胴つ腹を乗り切れ、一度は衝突だつた。が、どちらも瀬戸内海で、一度は春の末、一度は眞夏であつた。そして、そのどちらの時も救はれた。けれども、北海道の冬の海では逆も助りつこはあるまい。俺は、瀬戸内海で沈められた時に、海の中に飛び込みざま『助けてくれ』と怒鳴つた悲鳴を今でも思ひ出せる。その叫びを擧げる刹那は全く、ありとあらゆる記憶、あらゆる感じ、それ等のものが、一度に總勘定でもするやうに頭に浮んで來た。そして、『十八では未だ死ぬのに、二年早すぎる』と、俺は思つた。何で二年早すぎたのか自分でも分らない。けれどもハツキリ自分は二年早すぎると思つた。

おゝ！もし、あの船の人たちが、死んだとすれば、皆俺と同じ感じを、抱いて死んだことだらう。死ぬのには、人間は何歳になつても二年早すぎるのだと、自分は此頃考へるやうになつたが、全く、どの位多くの人が二年宛早く死んで行くことだらう。それにしても、此船長は何と云ふ冷酷、殘忍な奴だらう。僅か四哩や五哩より離れてゐないのに、その最後を見届けようとしなれないとは。自分の悦樂のためには此船長は俺達の生命を、いつでも鯨の前に投げてやるだらうに。俺は、その沈没船に代つても、又、この船員たちのためにも、船長と闘ふ時が必ず來ると信ずる」と、波田は考へに耽つた。

難破船は益々近づいた。日は暮れたけれども、未だ夕明りである。船は、今ならば、もつと難破船へ近附くことが能きるのであつた。が、わが、勇敢な萬壽丸は船員全體の希望にも拘らず、船長の一言によつて、冷やかに姉妹の死を見捨てて去ることになつた。そして、本船には、救助不能の信號が揚げられた。相手へ知らせためのでなく、乗組船員を胡魔化し、同時に海事日誌を胡魔化したための。

實際、此時暴化は段々風いで來たのであつた。船員は一時間前の勇敢なる船長の行動を不審に思ふのであつた。

その可愛い小柄な船は四十五度以上五十度近く傾いて、今にもそのまゝ、沈み行きさうに見えた。そして人はどこにも見えなかつた。甲板の上は見事に掃除されて、その掃除手の怒濤は、

僅かに甲板の隅に凍りついて残つてゐるのみであつた。マストのキャンパス（帆布）は、ハッチの上部カバーであつた。それは全く淋しい姿であつた。火のない船であつた。人の居ない船であつた。生命のない捨てられた世界であつた。われ／＼は皆サロンドッキに並んで、浪と運命を共にするであらう、その船に別れを告げた。誰の心にも黒い、寒い寂寥が蟲食つた。

これは、やがて、わが萬壽丸の運命でもあつた。われ等が、船底に飢ゑと寒さに倒れて漂流する時に、もう少し大きな船が又、われ等の傍を通るであらう。われ等は信號を掲げねばならぬことを知つてゐるだらう。又われ等は、人間がその船室に凍えかけてゐることを、知らせる必要のあることを知つてゐるであらう。それにも拘らず、誰も甲板に出ないであらう。出られないのだ。途中で仆れてしまふのだ。

そして、漸く、最後の一人がデッキへ這ひ出した時には、今汽笛を鳴らして通つた船は、浮べる一大不夜城の壯觀を見せて、三哩も行き過ぎてゐるであらう。

このやうにして、わが萬壽丸は汽笛を鳴らし通過した。その汽笛を微に聞いて、今立ち上らうとして、その凍えた體に最後の努力と藻掻きとを試みてゐる兄弟が、その船の中に居ないだらうか、その頼りない捨てられた犬の子のやうに哀れな形をした船の中に。

鐘が鳴つた。夕食である。水夫は水夫室に、火夫は火夫室に、各々入つて行つた。

難破船は、薄闇の中に、暴れ狂ふ怒濤の中に、傳奇小説の中で語られた悲しき運命の船の如くに、とり残された。

藤原は、船尾にランプを吊り上げながら、残された船を見送つて、堪へられない寂しさと、憤（ふさ）に心を燃した。

「あの船には、少くとも二十人の乗組員はあつただらう。それが養つてゐる、同じ數位の家族もあつただらう。あの中で二十人は凍死したか、ボートで溺死したか、どちらにしても彼の船の乗組員が助かると云ふことは考へられないことだ。二十人は遂々、その家族を残して、妻子はその主人に残されて逝つてしまはれたんだ。そして、その船に依つて、最も重大な利害を感じる等の船主は、今その宅で雪見酒を飲んでゐるのであらう。その二十人の不拂労働から、蓄めて經營してゐる會社の株のことを、電報が入ると直ぐに氣にするだらう。遺族には、香典が二十圓宛位は行くであらう。そして、船主は、二十人の人間のことも、その沈没するのが當然なほど腐朽し切つた、ぼろ船の運命に對して、高利貸式の執拗さで口惜しがつてゐるだらう」

「人間が生きて行くためには、どうしても人間の生命を失はねば生きて行けないのか、人柱！俺達は何人柱なんだ！」

五

水夫室では、水夫達が、犬ころが唸り合ひながら食へると同じやうに、騒ぎながら、夕飯を

食つてゐた。

負傷したボーイ長の側には、藤原と、波田とが居た。波田のベッドは、ボーイ長のとL字形に隣合つてゐるので、自分のベッドで、頭をかかめながら、うまい夕食を攝つた。全く、頭義通りに「喉から手が出る」程であつた。胃の腑へ届く食物は、そのまゝ直ちに消化されて、血管を少女のやうな元氣さと華かさとで駆け廻るやうに感じられた。彼は飯を口一杯に頬張りながら、ボーイ長の足許に波田と並んで、これを頬張つてゐる藤原に話しかけた。

「チーフメイトは來たかい」

「未だだよ」藤原は、全でそれが波田のせゐでありでもするかの様に、膨れつ面をもつて、答へた。

「随分無責任ぢやないか。三時間も打つ捨らかしとくなんて」

「距離が遠いんだよ。距離が、奴等のはね」藤原は謎の様に云つた。

「ハ、ハ、ハ、なるほどね、サロンから、おもてまでぢや三時間ぢや來られねえや」波田は、冗談だと思つて笑つた。

「五感と、神経中樞との距離がさ。鼻と口との距離と同じ程なんだよ」

ストキはひどく憤慨してゐるやうに見えた。

「それに、かう云ふことに馴れて、無神経になるつてことは、それが仲間のことであると、なほさら善くないね」

藤原は、話がむつかしいので、有名であつた。

彼は漢語見たいなもの——仲間の間でさう云つた——を使ひたがる癖が骨に沁み込んでゐるのであつた。

未だ食事が、始められて間もなく、チーフメイトは、ボーイに「救急箱」を持たせて、「大急ぎ」で駆け込んで来た。

水夫達は食事を中止した。そして、水夫見習のベッドを、チーフメイトと一緒にとり卷いた。「ボースン！こんなに暗くちや何も分らんぢやないか、蠟燭をつけて来い。五六本！」と、チーフメイトは一發放した。

かくて、蠟燭はつけられた。ボーイ長がそこへ寢始めてから、三時間目に初めて、彼の室は燈で照らされた。彼が船へ持つて来たものは、その體と、その切り捨てられた仕事着と、初期の禿頭病とだけであつた。

彼は、陸上でひどく苦しんだ。彼の家はひどく貧乏の上に、兄弟が十一人もあつた。彼は、小さい時分から、自分を養ふのは自分でなければならぬことを感じさせられて来たのであつた。

彼は、訴へるやうな目附きで、又、彼のそのやうな負傷にも拘らず、チーフメイトに直接物を言ふことを恐れて、遠慮勝ちに「痛あーい」と叫びた。

チーフメイトは何でも構はず、ボーイ長の左半身全體に、イヒチオールを塗りまくつた。彼は一分間でも早く彼の義務が終ればいいのであつた。醫者のやる様なことが、彼の義務であることも續に障ることであつたが、それは、彼が

それでパンを得てゐる以上、仕方のない災難なのであつた。彼は、彼もパンのために、そのいやな仕事を持つてゐることを知ると同時に、もつと悪い條件の下にパンを求めてゐるものがあり、それが「おもてのならずもの」どもであることを知らねばならない筈であつた。ところが、彼は、ブルジョアが、彼と自分とを區別してるとすつかり同じやうに、彼とセーラー等とを區別してゐた。「俺は紳士だが、奴等は勞働者だ」或はもつと正確には「俺は人間だが、奴等はセーラーだ」と。

チーフメイトは、限りなき嫌惡の情を含みながら、ボーイ長を滅茶苦茶に、イヒチオールで塗りまくることを、(面倒臭い餘りに、さうするのではない)と云ふ風にセーラーたちに見せた。彼は爲るなければならぬことの形式だけをやつて、然も感謝の念をセーラー達から盗まうとさへ企んだのであつた。

黒川鐵男、これがチーフメイトであつた。黒川は、イヒチオールを塗りまくる間に、口をきくことは、それほど仕事の能率を妨げないし、又、それ以上仕事を、汚くも困難にもしないと考へた。そして、彼がどんなに、此の「愚けら」のやうなボーイ長に對してさへ、人道的であるかを見せてやることはいい。と彼は考へた。

「おもては全く、寒いね、そしてまるで眞暗ぢやないか」と黒川は口を切つた。彼はボーイ長の胸部にイヒチオールを塗布しながら云つた。「満船の時はどうも仕方がありません」と、ボ

ースンは頼躬如として答へた。全で、全で、寒くて、暗くて、汚くて、狭いのは、ボースン自身の罪でもあるやうに。

「これぢやいくらお前等でも堪らないなあ」

「なあに、メイトさん、新造船だから、いい方ですよ」とボースンは答へた。

「暗くて寒いことあ今始まつたこつちやないや、おまけに風呂だつてありやしなかい、これでもおれ等は、人間並は、人間並なのかい」と藤原が後ろから、燃えるやうな毒舌を打つつけた。

チーフメイトは早速方向轉換の必要を痛感した。

「ボーイ長の傷は存外軽くてすんだね。俺はもうとても駄目だと思つてゐたんだよ、命拾ひしたわけだね」

「さうさ、すぐくたばりやもつと傷が軽いわけさ、手がかゝらねえからな」又藤原が口を出した。

セーラーたちは、何か起りはしないかと内心好奇心に驅られて「事」の起るのを待つてゐた。「黙つてろ！餘計な口を叩くな！」チーフメイトは遂々爆發した。

「黙つてろ？黙るさ、だが、手前等にや手前等の命は大切でも、人間の命が、どの位大切かつてこれは分る時はあるまいよ。ヘッ」藤原はそのまゝ自分の巢へ上つて、煙草に火をつけた。彼は明白にチーフメイトに挑戦した。

戦争はすぐ開かれるか、後で開かれるか、どんな形に於て開かれるか、それは水夫等全體を

昂奮の極に追ひ上げた。

黒川一等運轉手は彼の策戦が失敗したことを承認した。そして、多分此事はこれだけで片がつかないだらうと、云ふことも分つた。長びくやうな事件にならねばよいがと彼は心配してゐた。特にそれは、此場合では、彼にとつて絶対に都合のわるいことであつた。彼は、黙つて、早く手當を済ますに限ると思つたので、その手當を急いだ。

かくして、イヒチオールはそれが、その本来塗らるべき處であらうと、又は、傷をなして赤い肉の出た處であらうと、出血してゐる處であらうと、お構ひなしに塗りたくられた。又、如何なることが起きてても、起らなくても、ボーイ長の左半身全體を眞黒くすると云ふことは、彼の三時間に互る熟慮の結果であつた。

そしてチーフメイト黒川鐵男は、そのプログラムに従つて他意なくやつてのけた。何等親身な情からでもなく人間的な氣持からでもなく、安井——水夫見習——は、その全半身にたゞ氣やすめだけのイヒチオールを塗布された。それは義務を果すための一つの對象にすぎなかつた。安井は呻いた。「おかあさん、おかあさん」と叫んで救を求めた。そして眼を開いては、絶望のどん底に眞つ暗になつて落ち込んでしまつた。彼は、體の傷みに共に、堪へ得ぬ渴と餓とに迫られてゐたのだつた。

六

安井の手當がすむと、水夫達は、改めて、食卓に就いた。そして、いつでもは安井がボーイ長の職務として、食事の準備、後片附等はするのであつたが、今日は、波田が引き受けた。「安井君、何か食へたくはないかい」と、波田はボーイ長に訊いた。

「喉が渴いて、腹が空いて、堪らない」と、彼は辛うじて答へた。

「そいぢや今持つて来るから待つて呉れよ」

波田は、コックに、卵を呉れるやうに頼んだ。「卵なんぞ贅澤なものが、おもてに使へるかい、ほけなす奴！」波田は一撃の下に、卵なんぞ「おもて」の者の口に入りかねることを教へられた。然し、若し、卵がなければ、流動物を與へるのに困るのであつた。

「どうだらう、ボーイ長が固い物は食へられないだらうと思ふんだが、何か寢てて食へるやうなものはないだらうか、とも（高級海員の事）のコーヒールへ入れるミルクを一罐分け分けて貰へないだらうかなあ」波田は食餌のことは、チーフメイトが醫者序にやるべきものと考へたけれどもまた「やるべきこと」は俺達だけにあるんだと思ひかへた。

「それぢやシチャード（司廚司）へ話して見ろよ！一兩位出しや分けられねえこともねえかな、ぐれえなとこだらうぜ」このコックはおもての食費を胡魔化するために、とものコックから、給料を下げてまでも、おもてへ一つ船で鞍がへした、途轍もない「悪」であつた。

「此野郎、鼻持のならねえ野郎だ」と思ひながら、波田は、シチャードへ、ミルク一罐と、卵十個分けて貰へないかと交渉した。

「ボーイ長にやるんだつて、あゝ、いいとも、持つて行きな、さうかい、ぢやあパンを一斤許り持つてつて、牛乳と卵とで濕してやるんかい、ほら、こゝに砂糖と……それだけでいいかい、そしてどうだね、ボーイ長の容態は」シチャードは親切に倉庫から、それ等のものを策へ出して呉れた。

「どうもありがたう。金は後でおもてから拂ふからね、當分濟まないが借して呉れないか」波田は全く嬉しかつた。

「いいよ、そんなことあゝ、氣をつけてやりな、若いもんだ。先のあるもんだからな」

「あゝ、そいぢや、ありがたうよ」

波田は、ともかくそれ等のものを持つて来て、ボーイ長に與へた。

彼は飢ゑた狼のやうに貪り飲んだ。ボーイ長が食慾を失つてゐないことが、波田には大層心強く思はれた。

彼が安井のために、食事の支度をする間に誰かが食事を終つてゐた。そして、茶碗や、徳利（醬油）はこぼれないやうに、各々其始末さるべき處へと仕舞はれてあつた。彼は、それから又、自分の分を繼續しなければならなかつた。船の動搖は甚しかつたが、満船してゐる關係上、動搖以上に浪の打込みが甚しく、そのため、水夫室の頭上では、鐙が浪と衝突して少しでも緩

みが来ると、今にもサイドを押し割りさうに、メリ／＼と鳴った。

波田は、それ等のことには、外の誰もと同じく馴れ切つてゐるので、二度目の夕食をうまく食ふことができた。

彼は、腹には詰め込みながら、耳には、セーラーたちの「煙草」の話を聞いた。暴化した後では、きつと話がしんみりするのであつた。いつでも巫山戯るにきまつてゐる三上さへも、一二度極端な、女郎に關するその話題を提供して見たが、反響がないので、それ以外に話すことを全然持たない彼は黙りこくつて、すぐにその寢床にもぐりこんで、三十分間をぐつすりと寝ることに決めたらしかつた。

疊敷にはできない形ではあるが、それをその面積に換へれば六疊位は敷けるだらうと思はれる「おもて」には、上下二段にベッドを作りつけて、水夫長、大工、舵取を除いた、水夫五人と、おもてのコックが一人と、ストキとが寝るやうに出来てゐて、その中央に、テーブルと、ベンチとが作りつけてあつた。で、おもてでは、一切合切がギリ／＼一杯であつた。食卓は、用事が済むと、室の眞ん中に立つてゐる柱に添うて上に吊り上げられるにしても、矢張り一杯一杯であつた。そして道具置場は、その食卓の下を潜つて、船首の尖つた處が、さうであつた。わが萬壽丸は甚しく團扇に似てると云ふ定評があつてさへ、矢張り船の船首の部分は、いくら尖つてゐることが、これで見ても分るので

あつた。

そして、窓は總て、二重に嚴密に閉され、デッキへの鐵の扉までが嚴重に閉されたから、空氣は全く動かなく通はなくなつてしまつた。そして、此、太鼓の内部のやうな船室は、皮であるべきサイドの鐵板が、波濤に叩かれて堪なく轟くのであつた。

その間にボーイ長は、その負傷の疼痛を、陸上の父と母とに訴へた。摺手木のやうに神經の持ち主であるセーラーたちも、環境がかくの如くであるために、ひとりでにしんみりしてしまふのであつた。そして、彼等は、いつでも、しんみりするのを好まなかつた。それは、彼等を、此世の中で一番詰らない役割に引張り込んでしまふからであつた。と云ふのは、いつでも彼等は最も詰らない役割であるのだが、それを本たうに彼等に手きびしく覺らせるからである。誰でも、自分が踏みつけられ、馬鹿にされることを喜ぶものはない。わがセーラー達もしんみりする時必ず、さうであることが分るやうに獨りで考へるのであつた。そして、船乗りの氣質として、そんなに自分たちを「コミヤル」(餘餘労働を搾取すると云ふ意が含まれてゐる船乗り言葉)奴は容赦しない筈であるのだが、それが「能き得ない處に、彼等が、しんみりした度に悄氣込み、次いで自暴自棄になると云ふ結果が生れるのであつた。

彼等は、自分達が人間であることを知つてゐた。そして、人間らしからぬ生活に追ひまわられてゐることを知つてゐた。そして、彼等はどうすれば、これらの不都合な生活から人間らしい生活へ入れるかを、絶えず考へ、其機會を伺つてゐた。そして彼等は其の考へを纏めることも、機會を捕へることも能きないで「小資本を貯めるための、極めて短い時間だけ、此の危険な仕事によつて金儲けしよう」とした最初の考へは、そのまゝ彼等を怒濤の上で老年にしてしまひ、磨滅した心棒にしてしまふのであつた。

その夕、ボーイ長のベッドの側に集つた藤原、波田、小倉の三人は、皆ひとくしんみりしてゐた。

七

「俺たちは何だつてこんなに泥棒猫扱ひに、いぢめられるんだらうなあ」と、藤原が溜息と一緒に吐き出すやうに云つた。一時の昂奮から、夕方ボーイ長のことで來たチーフメイトとの事を思ひ出して、きつとよからぬ豫感に襲はれたのだらう。

「それやあ君、泥棒猫だからさ」と小倉がへうきんに答へた。彼は人に落膽させまいとして、いつでも骨を折る氣のいい正直者であつた。「どうしてなんだらう」藤原はおとなしく訊いた。

「十四の猫の中の二匹が泥棒猫であつても、その全體が泥棒猫と思はれるんだからな。況して君、十四の中八匹がさうだつたら、勿論泥棒猫團だらうよ」

小倉は答へた。

「それぢや、僕等は一體、生れつき泥棒猫だつたらうかね」

「多くはさうだね。詰り僕等が泥棒猫であつたにしても、それは僕等の知つたことぢやないことになる譯だ」

「と云ふ」と藤原は小倉に訊きかへした。

「詰りさ。僕等は、その飼主から見れば役に立たない泥棒猫なんだ。ね、いつ主人のものをかつぱらふか油斷も隙もありやしない、とかう、見られてゐるんだ。だから、主人の方ぢや僕等を泥棒猫扱ひするんだ。扱ひだけぢやないんだ、僕等を眞物の泥棒猫か、もつと適切に云へば、去勢した馬車馬と考へてるんだ。だから、主人、詰り、資本家から云へばさね、僕等は、彼等が僕等を爲ようと思ふ儘にされてゐることが、唯一の方法なんだ。だから、船主が『水夫等は晝飯を食はない方が労働能率を上げるだらう』と思へば、僕等から晝飯をとり上げてしまふし、

室蘭、横濱間は三日で航海すべきだから、糧食はカツキリ三日分でよろしい。難破したり、遅航したりすれば、それは奴等の例の怠惰から來たもので、俺の方の損害の方が大きいから、それ以上の積込は相ならぬ、と云ふことになれば、それも正しいのだ」小倉は極めて眞面目に、説法でもするやうに靜に云つた。

「フーン、して見ると、僕等もその考へに適應しなければならぬのかい」藤原は、小倉に訊いた。

「適應する必要は勿論ないさ。然したゞ適應する者のあることだけは事實なんだ。僕は資本家が自分自身の肉體の構成と、労働者の肉體構成とが、全然、異なるものであると考へてゐるだらうと思ふ」

「それで、さうなら僕等はどうかつてんだね」と藤原は訊いた。

「それで、僕等は、僕等としての『意識』を持つ必要が生じて來るんだ。資本家や、資本家の傀儡、共が、商品を濫造するやうに、濫造した、出來合の御用思想だけが、思想だと思ふことを止めて、僕等にもや僕等の考へ方、行ひ方があることをハッキリ知らなきゃならないんだ」小倉は頭の中で、辭書のページでも繰つてゐるやうにして云つた。

「どうして、それを考へ、どうしてそれを知れればいいんだ」藤原は問を止めなかつた。

「それは、餘り困難な問題だ。僕はそれで惱んでゐるんだ」と小倉は答へた。

「小倉君『人間は萬物の靈長なり』と云ふ人間の造つた言葉があるだらう。そこでね。僕は、昔から、一番苦しい、貧しい、不幸な階級の中で、又殊に貧しい不幸な呪はれた人々でも、萬物の靈長だつたんだらうか。と考へることがあるんだよ。『俺はあの犬になりたい』と奴隸は主人の犬を見て思はなかつただらうか。『俺は燕になり度い』と、誰かが殘虐な牢獄の窓に縋つて思はなかつただらうか。『俺は狼になり度い』と、詰らぬ因襲と制度とから、切腹を命

じられた武士は思はなかつただらうか。『俺は豚になりたい』とを食の子は思つたことはないだらうか。小倉君。僕は、行く行くはさうなることを信じてゐるが、今では、人間は萬物の靈長でもないと思つてゐるよ」藤原は煙草に火をつけた。

「それや僕もさう思ふなあ。僕だつて鱈になり、と思つたことがあるもんなあ」と、波田は初めて、その突拍子もない口をきつた。

「人間は萬物の靈長であるに拘らず、人間だつてことは僕は信じるよ。だが、人間が萬物の靈長だつてことは、僕も、尤も僕は今まで、そのことをそんな風に問題にしたことがなかつたがね、人間は、兎も角賢い動物だとは思つてゐたよ。賢い癖に、詰らぬ處に力瘤を入れたり、どんな劣等動物でもないやうな詰らないことを、人間の特徴と誇りながらしたりする動物だらう、人間つてもものは。ハハハ、これが小倉の人間觀であつた。

「人間が萬物の靈長だなんて問題に、コピリつくことはもう止さう。が、全く人間も他の動物と同様に食ふため、生殖するために、地上で蠢動してゐるんだね」藤原は人間であることを悲しむやうにかう云つた。

「食ふことで、生殖することだけで活動してゐる小倉が皮肉な聞き手になつた。

「まあさうだね」と藤原は一寸苦笑した。「ところが君、ブルジョアはそれ以上の高利貸